

ソーシャルディスタンスを意識したグループワーク手法の試案

A proposal for a group work method that considers social distance

間嶋 崇[†] 植竹 朋文[†]
Takashi MAJIMA[†] Tomofumi UETAKE[†]

[†] 専修大学 経営学部

[†] School of Business Administration, Senshu University

要旨:

新型コロナウイルス感染症の流行拡大によって、大学などの教育機関においてはオンライン講義が一般化し一定の教育効果を上げてきている。しかし一方でディスカッションを伴う演習やグループワークなどの協同学習においては、オンライン環境では十分な効果が得難いことも指摘されており、対面環境での学習の重要性も認識されている。したがって、このような状況においては、オンライン環境での協同学習の実施方法の工夫ももちろん探求する必要があるが、三密を避けた形で対面による協同学習の効果的方法の探求も必要であると考え。そこで本研究では、ソーシャルディスタンスを意識した対面による効果的なグループワーク手法の試案する。

Abstract:

Due to the spread of the new coronavirus epidemic, online lectures have become commonplace in universities and other educational institutions, and have achieved a certain degree of educational effectiveness. However, it has been pointed out that the online environment is not sufficiently effective for cooperative learning such as exercises and group work involving discussion, and the importance of learning in a face-to-face environment has been recognized. Therefore, it is necessary to explore effective methods of face-to-face cooperative learning that avoid the three densities. In this study, we propose an effective face-to-face group work method that considers social distance.

1. はじめに：コロナ禍に阻害される協同学習

現在、新型コロナウイルス感染症の流行拡大によって、各種教育機関では、講義のオンライン化が進み、講義のやり方にさまざまな影響が出ている。たとえば、講義型の授業にあっては、Google クラウドルームなどのLMSにおいて動画や音声資料を活用することで予習・復習の促進に有益な効果が期待できる。また、課題の整理や採点などにおける効率化も期待できる。

例えば、早稲田大学はじめさまざまな大学がオンライン講義に関する学生への調査[1]を行なっているが（早稲田大学の他にも立教大学[2]や国際基督教大学[3]、関西大学[4]、帝京大学[5]などの調査結果がインターネットで閲覧できる）、学生の観点からは、移動が不要であり、自分のペースで学習が出来、何度も復習出来るなど、異口同音に学習に関する効率性がメリットとして挙げられていた。また、神奈川大学での教員への調査[6]においては、資料の提示のしやすさなどが指摘されている。

しかし一方で、演習を伴う科目などは、ビデオ会議システムを活用したとしても受講者同士で行うディスカッションやロールプレイングなどのグループワークの場で活発な意見交換がしづらかったり、集中できなかつたりなど、協同学習の十分な効果が得難く、対面との違いに戸惑うことも多い。そのため、それを克服するための工夫が必要となるが、例えば、大角（2021）では、経営情報論の授業においてオンラインでのグループワークに慣れるためのブレイクアウトルームセッションに関するオリエンテーションを2回行なったり、意見交換のしづらさを補うzoom機能の利用方法を発見したりなど、準備や実施方法の変更に多大な労力が要ることが示されている[7]。また、田中（2021）では、オンライン上

のロールプレイングを断念し、その代替として教員が演じ録画した動画を視聴するという形を取るなど、やはりこれまでにない苦勞を伴っていることが示されている[8]。これらのことから、我々は、オンラインでの協同学習の工夫ももちろん探求する必要があるが、一方で、三密を避けた形で対面による協同学習の効果的方法の探求も必要であると考え。

そこで本研究では、感染拡大防止策を徹底した中での対面による効果的なグループワーク手法の試案を探求、提案する。

2. 方針：コロナ禍においても対面でグループワークをするために

ビデオ会議システムを用いてグループワークをオンライン上で実施しようとする、コンテンツそのものやその実施方法の大幅な見直しだけでなく、実施に耐えうる教室の設備や学生のネット環境の整備など、講師と学生の双方に大きな負担がかかる。また、zoomのブレイクアウトルームセッションのような、オンライン上でグループワークを実施する仕組みも提供されてきているが、グループワークのすべてをオンライン上で実施する方法では、以下のような問題点が生じやすく、意見交換の難しさや温度感・理解度が測りにくいといったデメリットも発生している。

- ビデオ会議システムの制約
 - 複数人が同時に会話することが困難
 - そのため発言が重なったら嫌だから、発言に消極的になる
 - また、議論に時間がかかる
 - 相手の反論にトゲがあるように感じてしまい、過剰に反応してしまう

- 各自が異なる場所から参加するため、一体感が生まれにくい
- マイクオフ、カメラオフを続ける学生の存在
 - 教員の目の届かない瞬間が多く、フリーライダーが存在する
 - 誰かが声をあげないと話し合いが始まらない
 - 返事が返ってくるのか不安もあり、声をかけるのに勇気がいる
 - 表情が見えず、相手に伝わっているのかも分からない

そこで本研究では、従来講義中に実施していたグループワークに近い環境で、リアルとオンラインを組み合わせた分散型オンライングループワークの実施を検討することにした(図1参照)。

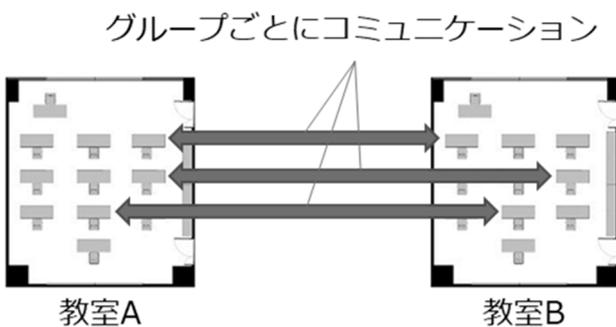


図1 実施方法のイメージ

この方式を採用することにより、以下のメリットが得られると考えられる。

- 従来のグループワークのコンテンツを最大限活かせる
- 参加する学生が同一施設に集まるので一体感を形成できる
- 教員がグループワークをマネージすることが容易になる
- 実施する教室を分散することにより、感染症のリスクを軽減できる

3. 経営学教育におけるグループワーク

経営学は実践的な学問であると言われていたがゆえに、理論をただ覚えるだけでなく「出来るようになる」ことも重要な学びであると考えられる。したがって、経営学の教育には、能動的な学習、とりわけ実践的な(体験的ないし疑似体験的な)学習手法の採用がとりわけ肝要であると考えられる[9]。我々は、その学習の能動性・実践性を高めるために、以下(図2参照)に示すようなPDCAサイクルに基づくグループワークを開発した[10]。

まずグループワークに取り組む前にアイスブレイクからスタートする。授業時間(90分)内での実施を想定し短時間でグループワークを行うため、その質を高めるにはアイスブレイクが必須となるからである。また、課題に対する理解を深めるために、練習と本番の二度のグループワークを行うこ

とにした。さらに、各グループワークの終了後には、受講生間の社会的学習(他者の観察と模倣による学習)や各自の経験的学習の効果を高めるために、グループ間の相互閲覧とグループ内の対話的な振り返りの時間を設定した。最後に、ここまでのグループワークの経験的な学びと経営学的なコンセプトや理論を結びつけるレクチャーを実施する。また、同レクチャーでは、映像資料を用いることでマネジメントの現場での応用可能性の理解も合わせて促す(表1参照)。

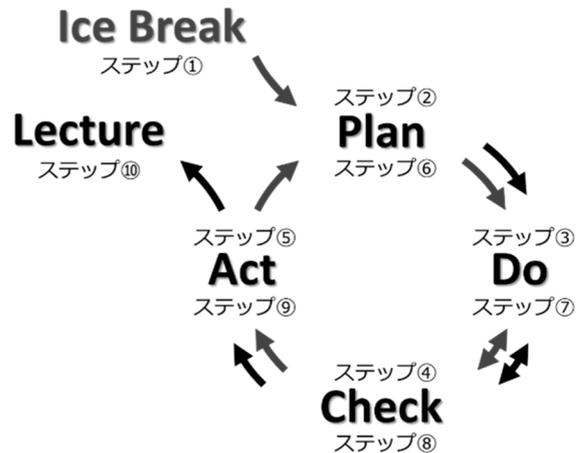


図2 グループワークの実施ステップ

次節で説明する本稿の提案もこの方法に基づいて設計されている。

表1 グループワークの実施ステップの詳細

ステップ①	アイスブレイク①②
ステップ②	課題説明とプランニング
ステップ③	グループワーク(練習)の実施,
ステップ④	相互閲覧
ステップ⑤	振り返り
ステップ⑥	課題説明とプランニング
ステップ⑦	グループワーク(本番)の実施,
ステップ⑧	相互閲覧および評価
ステップ⑨	振り返り
ステップ⑩	レクチャー(経営学的意味づけ)

4. ソーシャルディスタンスを意識したグループワーク手法の試案

ビフォーコロナにあつて我々は、前節のグループワーク手法を用い学生の学びへの主体性を引き出すことを試みてきた[9][10]。しかし、上述のごとき協同学習が阻害される現状にあつて、新たな手法の開発が必要になっている。そこで本稿では、以下の通りソーシャルディスタンスを意識したリアルとオンラインを組み合わせた分散型のグループワーク手法を提案する。順を追って説明したい。

4.1. アイスブレイク

今回のグループワークでは、メンバー間の相互理解を促進するために、以下の2つのアイスブレイクを行った。

● **アイスブレイク①:**
笑顔と air ハイタッチで自己紹介

このアイスブレイクは自己紹介と air ハイタッチを組み合わせ、互いのことを理解しながら一体感を生むことを意図している。以下の順序で実施する。

1. まず立つ!
2. 出身地と自分の名前を言う
3. 今日呼んでほしい名前を言う (名字以外)
4. 今日あった良いことを言う
5. 聞いているメンバーの顔を笑顔で見る
6. 聞いている人は、目があったら、指定された名前 + 「良い笑顔ですね」と言って、air ハイタッチをする

● **アイスブレイク②:**
となりのとなり自己紹介

このアイスブレイクは自己紹介とポーズを組み合わせ、相互理解と共にポーズを記憶していくゲーム性による一体感ならびに良い雰囲気醸成を意図している。以下の順番で行う。

1. ①番の人がまず「顔と手を使ったポーズ」と取りながら「名前」と「今日あった良いこと」を言う
2. ②番の人は、①番の人がとったポーズで①番の人の名前と今日あった良いこと + 「のとなりの」 + 「顔と手を使ったポーズ」と取りながら「名前」と「今日あった良いこと」を言う
3. ③番の人は、①番の人のポーズで①番の人の名前と今日あった良いこと + 「のとなりの」 + ②番の人のポーズで②番の人の名前と今日あった良いこと + 「のとなりの」 + 「顔と手を使ったポーズ」と取りながら「名前」と「今日あった良いこと」を言う
4. ④番の人は、…と最後のメンバーまで繰り返す

また、アイスブレイクを実施する際は、その効果を高めるために以下の点に注意した。

- 自己紹介の時は、聞いている人全員と必ず目線を合わせる
- 他の人とポーズがかぶらない
- 笑顔でいる

4.2. グループワーク

次にソーシャルディスタンスを確保し行えるグループワークを実施する。今回は、昨年度に実施したワークである「分業のメリットとデメリットの克服」について経験的な理解を促すための「人間コピー」を例示する。

- **オンライン環境を考慮した人間コピー**
このグループワークは、グループメンバーがお題に指定さ

れた絵を見る人とその絵をコピーする(そっくりの絵を描く)人に分かれ、絵を見た人の指示に従いながら、絵を完成させるワークである。まずは、比較的簡単な絵を写し、2回目は少し複雑な絵をコピーする。その際、第2節で示した通りソーシャルディスタンスを確保するために、お題の絵とその絵を見て指示する人と、指示を受けて絵を描く人とを別々の教室に分散し、さらに各グループの両役割はスマホのビデオ会議アプリを用いて指示ややりとりを行うようにした。進め方は、以下の通りである。

➤ **進め方**

◇ **絵を見る人**

- 絵を見に行ける
- 見た絵を描く人にオンラインで伝える
- 自分で描くことはできない

◇ **絵を描く人**

- 絵を描ける
- 直接絵を見に行くことはできない
- 絵に見る人の話をオンラインで聞いて絵を描く

本ワークでは、ワークにおける指示のプロセスを相互に観察することができ、また、絵を描いている最中は別のグループの絵を見ることは出来ないが、完成後に各グループの絵は公開され相互に観察することが出来る。そのため、1回目のワークの2つの相互観察と、2回目のワークが始まる直前の作戦会議の時間によって自分たちがどうすべきであったかを振り返り、ワーク遂行において何が重要であるか理解を深めることが出来る。

グループワークの様子を図3に示す。



図3 グループワークの様子

提案したグループワーク手法を実施する際に用いたスライドを図4に示す。

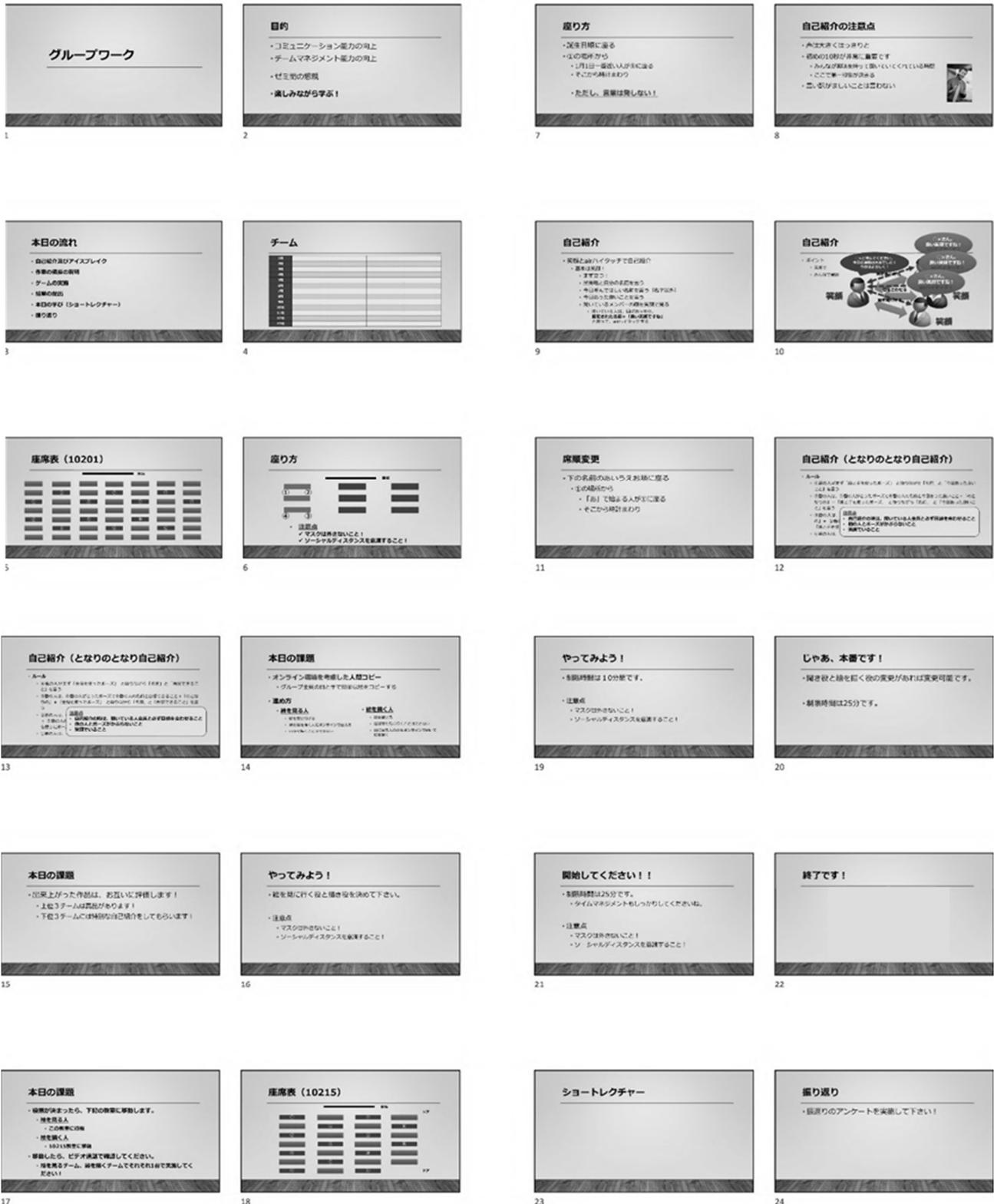


図4 グループワークに利用したスライド

4.3. ショートレクチャー

グループワーク実施後に当該グループワークに込められた経営学のコンセプトに関するレクチャーを行い、学生たちが実施したグループワークとコンセプトをつなげるようにする。昨年度実施したグループワークは上述の通り、「分業」についてであったため、分業とは何か、そのメリット、デメリット

と克服方法についてレクチャーを行なった。また、上述の通り、映像資料も交え、マネジメントの現場との関連性についても理解を促した。

図5に今回実施したグループワークのレクチャーに用いたスライドを示す。

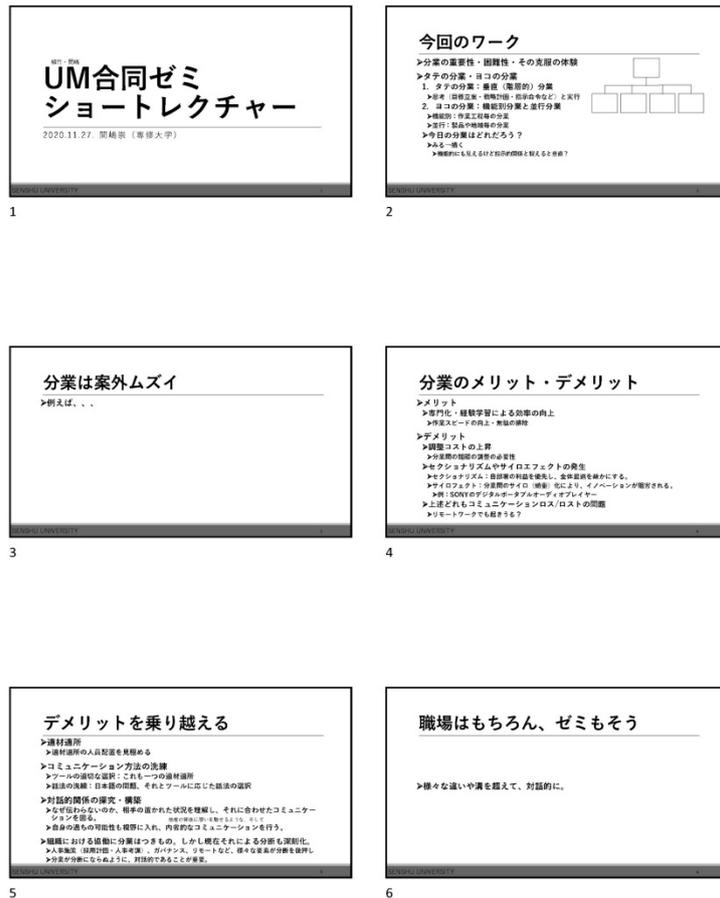


図5 ショートレクチャーに利用したスライド

4.4. 振り返り

最後に、グループワーク終了後に、他のグループの最終的な作品を見て、自分のグループの作品及びグループワーク全体について、グループメンバー全員で振り返り、振り返りシートを作成する。この振り返りの作業を行うことにより、以下のメリットが得られると考えられる。

- 個人およびグループの作業が再構築される
- 同じ事実異なる観点が入り、解釈が変わる
- 参考となる姿勢や考え方、知識などが多数獲得できる
- 新たなアイデアや手法が生まれる

5. 結果

実施したグループワークと利用した ICT ツールの効果をはかるために、各グループワーク後に理解度などに関するアンケートを実施した。

5.1. グループワークのアンケート結果の検討

ここでは、参加者（大学生2,3,4年生, 56人）に対してアンケートを取り、以下の項目を計測した。

- 参加者の各コンセプトの理解度
- 協働の有効性を高める大事な要素についての理解
- 本研究で提案した手法の有効性

なお、同アンケートは、潮(2014)を参考に作成した[11].

表2 グループワーク後のアンケート項目

Q1	楽しんで取り組みましたか.
Q2	レクチャーは理解できましたか.
Q3	グループワークのやりやすさはどうでしたか
Q4	コミュニケーションの取りやすさはどうでしたか
Q5	目的達成に効果的な協働を実践するのに大事なものは何ですか. 以下の中のトップ3を記号で挙げてください. a. 強いリーダーシップ b. 自主的な態度 c. 穏やかな雰囲気 d. 明確な指示出し e. 具体的な計画 f. 信頼関係 g. 努力 h. あうんの呼吸 i. 経験

筆者作成

5.2. グループワークの満足度

まず、このグループワークをやってみた感想に関するアンケート結果をみてみる。楽しんで取り組めたかどうかについての満足度に関する結果を表4に、難易度についての結果を表3に示す。

表3 グループワークの満足度

とても楽しめた	多少楽しめた	どちらでもない	あまり楽しめなかった	全く楽しめなかった
80.4%	17.9%	1.8%	0%	0%

筆者作成

5.3. グループワークの理解度

次に理解度についてのアンケート結果(表4参照)をみてる。

表4 グループワークの理解度

とても理解できた	理解できた	どちらでもない	あまり理解できなかった	理解できなかった
71.4%	23.2%	5.4%	0%	0%

筆者作成

アンケート調査の結果、95%程度の参加者がコンセプトの理解が深まった(「とても理解できた」もしくは「理解できた」と回答しており、当初の狙いについては達成できたと考えられる。

5.4. 協働に重要な要素の検討

次に、協働に重要な要素についてみる。図6より、以下の項目が上位を占めていることが明らかになった。

- 「明確な指示出し」
- 「具体的な計画」
- 「自主的な態度」
- 「信頼関係」

つまり、分業のメリットを活かしデメリットを削減するにあたり、事前の分担に関する計画や明確な指示だけでなく、積極的な態度やコミュニケーションロスを解消する対話的な信頼関係の構築が重要であることを考えると、同グループワークにより分業の重要なポイントが理解されたことが推察される。

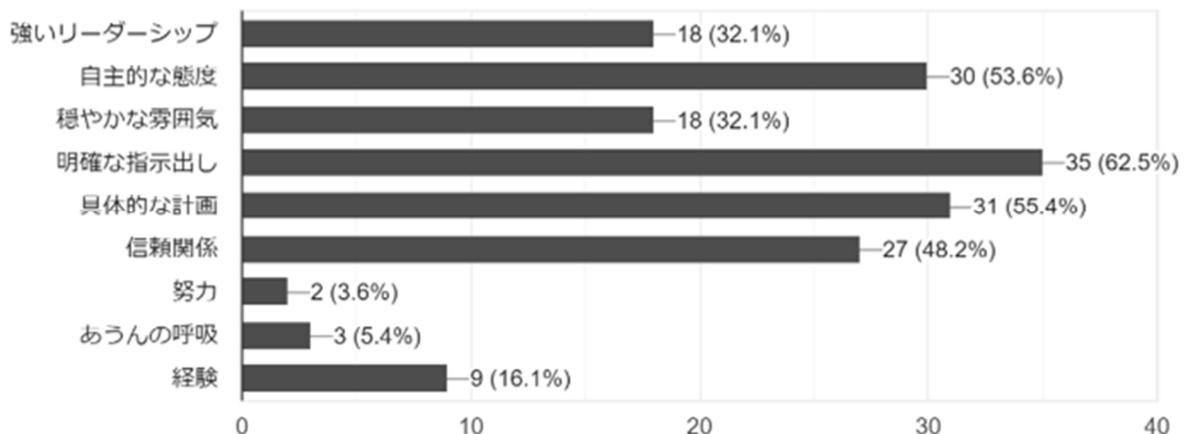


図6 協働に重要な要素

5.5. グループワークのやりやすさとコミュニケーションの取りやすさの検討

次にグループワークのやりやすさとコミュニケーションの取りやすさについてのアンケート結果(表5)をみてる。

表5 グループワークのやりやすさとコミュニケーションの取りやすさ

	とても良い	良い	どちらでもない	あまり良くない	良くない
グループワークのやりやすさ	83.9%	8.9%	7.1%	0%	0%
コミュニケーションの取りやすさ	82.1%	12.5%	5.4%	0%	0%

筆者作成

調査の結果、92.9%の学生が本ワークに取り組みやすかったと回答し、また、一部ビデオ会議システムアプリを用いた教室分散型の形式であったものの94.6%の学生が「コミュニケーションが取りやすかった」と答えている。このことから、本ワークでは、密を避けながら、オンラインでは得難かった円滑なコミュニケーションを得ることが出来たと理解できる。

5.6. グループワークのイメージ

次に、参加者が今回のグループワークを実施した感想について特徴的なものを以下に挙げる。

- 楽しくグループワークをし、伝達の難しさについて学べたのでとても良かったです。
- 何においても自分から発信することの大切さを改めて感じた。
- コミュニケーションの難しさを知りました。
- 対面でやりつつ、オンラインの要素もあった点が面白かった。
- どんな世の中の下状況下であっても、人の交流というのは途絶えさせてはいけないと強く感じた。オンラインでもコミュニケーションはとれるが、対面だからこそできることもあると感じた。

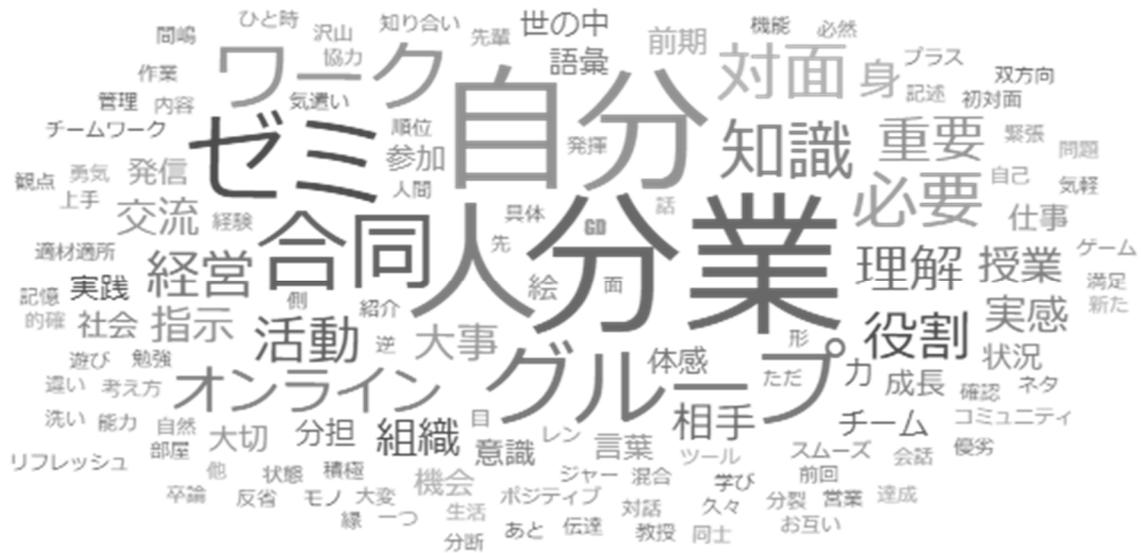


図7 グループワークの感想をまとめたワードクラウド

- オンライン授業を前期から行なっていたので、オンラインでのコミュニケーションの取り方も理解していたつもりでしたが、授業では教授からの一方的な発信で、今回のように双方向性のコミュニケーションは取り方が難しいと感じました。
- たとえ世の中がどのような状況下であっても人との交流というのは絶やしてはいけないことを改めて知ることができました。こう言った交流の機会がまたあれば今回の反省点を生かして取り組みたいです。
- 対面とオンラインツールを混合して、いつもとは違った形で合同ゼミができてよかったです。役割は適材適所を行うことができ、いいチームワークを發揮できたと思います。
- スマホの回線が悪く、時々固まってしまって伝えづらい場面があったのが残念でした。
- やはりグループワークは実際に会ってやるべきだと思います。
- 人に指示を出し、正しく動かすことがどれだけ難しいことか実感することができた。これから、語彙力や人に伝える力を成長させる必要があると感じた。

以上のことから、本研究で提案した手法は概ね所期の目的を達成できたことが明らかになった。ただ一方で、通信回線の問題や、グループワークの進め方に改善の余地があることも明らかになった。

最後に、自由記述の感想をワードクラウドで分析した結果を図7に示す。この図7より、今回のテーマである分業が大きく意識づけられたと共に、そこで重要な役割(分担)すなわち適材適所やお互いを理解する対話的關係によるチームワークの重要性などが参加者によって意識されたことが理解されよう。

6. まとめ

以上のように、本稿では、従来講義中に実施していたグループワークに近い環境で、リアルとオンラインを組み合わせた分散型オンライングループワーク実施方法を思案した。そ

して、実際に運用した結果、以下の点が明らかになった。

- 従来のグループワークのコンテンツをほとんど修正することなく実施することができる
- 参加する学生が同一施設に集まることで、教員がグループワークをマネージすることが容易になるとともに、学生も一体感を形成できる
- 実施する教室を分散することにより、感染症のリスクを軽減できる

しかし、アイスブレイクやグループワーク実施時に、部分的にソーシャルディスタンスが確保できないケースも存在したため、さらなる実施方法の工夫が必要である。また、受講した学生の中には、十分な理解を得られなかった学生もいたことから、コンテンツについても、実施環境に合わせた工夫が必要であることが明らかになった。それらについては、今後の課題とすることにした。

謝辞

本研究は、令和2年度 情報科学研究所 共同研究助成「オンライン環境におけるグループワークを伴う経営学領域での授業手法に関する研究」(間嶋崇・植竹朋文)の助成を受けたものであり、その成果の一部である。ここに記して感謝したい。

参考文献

- [1] <https://www.waseda.jp/top/news/70555> (2021年6月21日閲覧)
- [2] <https://www.rikkyo.ac.jp/news/2020/09/mknpps000001bg3b-att/report.pdf> (2021年6月21日閲覧)
- [3] <https://drive.google.com/file/d/16VMR2bhgq5gHkmjwyVTW53Bq8d8OO1Ly/view> (2021年6月21日閲覧)
- [4] https://www.kansai-u.ac.jp/ir/taimen_survey_2020au_digest.pdf (2021年6月21日閲覧)

- [5] <https://ctl.teikyo.jp/fd/others/onlineresearch/> (2021年6月21日閲覧)
- [6] https://www.kanagawa-u.ac.jp/att/20645_48474_010.pdf (2021年6月21日閲覧)
- [7] 大角 玉樹「オンライン講義におけるアクティブラーニングの試み：コロナ禍における教育のデジタルイゼーションと講義デザイン」『琉球大学経営研究』(1), pp.50-59, 2021.
- [8] 田中 佐知子, 加藤 里奈, 小林 如乃, 小林 文, 山本 仁美, 「参加型演習科目『臨床心理学の活用』の遠隔授業での実施 ~オンラインを活用した教育システムの構築~」『薬学教育』第5巻, 2021.
- [9] 間嶋 崇, 橋田 洋一郎, 植竹 朋文, 「経営学教育におけるアクティブ・ラーニング手法の検討」, 『2015年度経営情報学会秋季全国研究発表大会予稿集』, pp.1-4, 2015.
- [10] 間嶋 崇, 橋田 洋一郎, 植竹 朋文, 「経営学教育へのアクティブ・ラーニング手法の導入」, 『専修大学情報科学研究所 所報』, 専修大学情報科学研究所, No. 87, pp.17-24, 2016.
- [11] 潮 清孝, 「『ペーパータワー』を用いた会計教育の取り組みとその効果」, 『第45回京都管理会計協会ディスカッションペーパー』, pp.1-8, 2014.